

呑川レポート2011-26号

厳しさ増す生き物の環境

前回の「呑川ウナギの戦い」レポートには、たくさんの感想をいただきありがとうございました。

一つ一つご返事を差し上げませんでしたが、感謝をしています。

さて、暑い日がまだ続きますが、それでも来週には平年並みの涼しさ到来とか・・・この夏を振り返って、いろいろ感じることしきりです。

その中で、生きものたちが厳しい環境にあえいでいるのを、目の当たりにしました。

2011/8/6は「おおたく環境探検隊」が「C&P」の協力を得て行った「セミの羽化観察会」（洗足池にて）でした。

あいにく私は、別の会合と重なって、短時間顔を出しただけで、スタッフとしての役割は果たせませんでした。

それでも、その短い時間に感じたのは、セミたちの哀れとも言える厳しい環境でした。



セミの「幼虫」は、5～7年にも及ぶ長い地中生活から這い出て、羽化する場所を探して、一生懸命歩きます。

誰にも見つからないように、ひっそり、夜の時間に・・・

戦う武器を持たないセミの幼虫は、この時が最大の、身に危険をさらす時間です。

でも敵は至る所にうごめいています。



じっさい、観察会を開いた洗足池のこの場所には、ガマガエルが沢山活動をしていました。アブラコウモリも低空を盛んに飛んでいました。



でも、ようやくめざす木にたどり着いたようです。
一生懸命、木登りをしています。
ここまで来れば、まずは一安心でしょう。

普段は真っ暗で見えませんが、人間が写真を撮るために懐中電灯で照らすとアブラコウモリに気がつかれる心配がありそうですが、そばに人間がいればコウモリも

近づいて来ません。

こうして、セミの幼虫は高い位置にある葉の茂みにたどり着いて、羽化をします。



ですから、陽の明るいときに木を見上げると、葉の裏側に、セミの幼虫がたくさん取り付き、

羽化をした跡が見られます。

セミは、夜に羽化を始め、明け方になる前に羽根を乾かして、飛び立つ準備をします。その前は、野鳥たちに見つからないよう葉の裏に隠れて、羽化の作業を進めるのです。

ところが、今回の洗足池での観察会で見たものは・・・



こんな低い位置で、しゃがんで観察をしています。
高い木の上の方を眺めている、セミの羽化観察風景と少し違います。
どうして、カエルが飛びつくことが出来るような低い位置で、羽化を始めるのでしょ
う・・・？

そして、取り付いた葉をよく見ると・・・



身を隠すことが出来ないような、細い幅のシダの葉に取り付いているのです。
これでは、明るくなったら、野鳥たちからは見え見えです。
どうして、こんな危険な場所で羽化をするのでしょうか・・・？

それを理解するために、この場所の回りの環境を見てみましょう。



こんなにたくさんの草が生い茂っています。

地面から這い出たその場所に、こんなに草が生えているとは、セミの幼虫は思わなかったでしょう。

卵から幼虫になったとき、こんな場所だったら、ここでは地面に潜って行かなかったでしょう。

その後の人間の公園作りが、改変をしてしまったのです。

5年、6年過ぎ、地面から這い出たときの環境の違いに、幼虫はどんなにビックリしたでしょう。

最初に見た、地面を歩くセミの幼虫と違って、こんな草場では、歩くにも歩き辛くてたまりません。

しかしセミの幼虫は、必死で羽化する場所を探します。

時間がドンドン過ぎていきます。

でも、登る木にいったいどこにあるのでしょうか・・・

ついに木にたどり着くことが出来なかった幼虫は、危険を顧みず、そばに生えていたシダの葉に

取り付くしかなかったのです・・・。



ここでも、子どもの背の高さより低い場所での、羽化の観察をしています。



幼虫が殻を割り、羽根を広げようとしています。
このとき、羽根に緑色の血管がハッキリ見えます。
セミの血にはヘモグロビンが含まれていないので、血の色は赤くはありません。
身体の中に血を送り込むポンプがあり、その血液の押し込みで羽根を広げるのです。
それには、羽根がとても柔らかくなければなりません。

この時、幼い子が触ってみたくて仕方なかったのでしょうか。
ちょっと羽根を触ってしまいました。
私が「あっ！」と声を上げたので、みんなこちらを振り向きました。
「触らないで、じっと見ようね」と返事をしましたが、良くその意味は判らなかつたと思います。
柔らかくか弱い羽根は、ちょっとした刺激で血管の一部がつぶれたり、変形したりします。
そして案の定、一方の羽根は変形して広がったのです。
こういう変形した姿を見たのは、私は初めてでした。

とても可哀想で、私はその姿を写真に撮れませんでした。みんなはそれに気がつかずクライマックスを迎えた姿の写真をケータイでたくさん撮っていました。
みんなの関心は、羽根を広げた美しい姿にありましたから、関心が無いことには指摘されなければ意外と判らないものです。
指摘すれば、親からその子は怒られ、自分に責任を感じ、辛い思いをするでしょう。
親でも気がつかなかつたのですから、それをあからさまに指摘するのは、別の機会にするべきなのでしょう。



これは別の場所の、羽根が広がった直後の姿です。
羽根のフチには緑の血管が浮いていますが、神秘的で美しく、こんな風にきれいに広げられれば
拍手をしたくなります。
やがて羽根は乾き、飛ぶ時を迎えます。

先ほどのわずかでも変形した羽根は、おそらくうまく飛べず、これからの生活は野鳥などに
捕捉されやすく、厳しいものになるでしょう。

みんな、セミの羽化を見て「すごいっ!」「生きものってたくましい・・・」と声を上げます。
でも何がすごく、何がたくましいのか・・・言葉だけに酔ってしまいがちです。
でも私がここで見た姿は、羽化場所を見つけるのが困難な厳しい環境と、
触ったら壊れそうな幼虫の段階の弱々しさでした。

セミの羽化の観察の中心は、どうしても「始めに殻が割れて、次に頭の部分が出て、それから・・・」という羽化の過程だけに関心が行きがちです。
それはそれで興味深いのですが、生きものを取り巻く環境にも関心を・・・と
いつも願っています。
私はこの日の観察会には、短時間しかいられませんでしたので、聞かれたことだけに
わずかに答えただけでしたが、こちらの思いとは別に、子どもたちに「環境」のことを
話すのは難しく、どう関心を持ってもらうのか考え込んでしまいました。

話は変わりますが、2011/9/4に「おおたく環境探検隊」の「みんなの田んぼ」行事で、せせらぎ公園の「水質と水辺の生きもの観察」が行われました。

私は、この時「水質」担当でしたが、子どもたちにはたぶん訳が判らなかったようで、まったく失敗でした。

でも「水辺の生きもの」は、この「せせらぎ公園」の現状を如実に示すものとなりました。



これはいわずとした「アメリカザリガニ」です。

でも、この子はザリガニをつかんでいるだけでなく、もう一方の手をそばに添えています。どうしてでしょう・・・？

ザリガニのお腹をのぞいて見ると・・・



なんとザリガニの赤ちゃんがいます。
小さな赤ちゃんが「腹脚」に掴まっています。
ザリガニのメスは、赤ちゃんを育てるために、「腹脚」（腹部にある足）がとても長く、左右の脚が
重なり合います。
オスは、とても短く、ちょこんと付いているだけです。

ザリガニをつかんだ男の子は、このザリガニの赤ちゃんがポロポロと落ちるのを防ごうと、もう一方の手を添えたのです。
やさしいですね。

さて、「せせらぎ公園」のあちらこちらにいる「ザリガニ」の他に、どんな水辺の生きものが
いたでしょう。

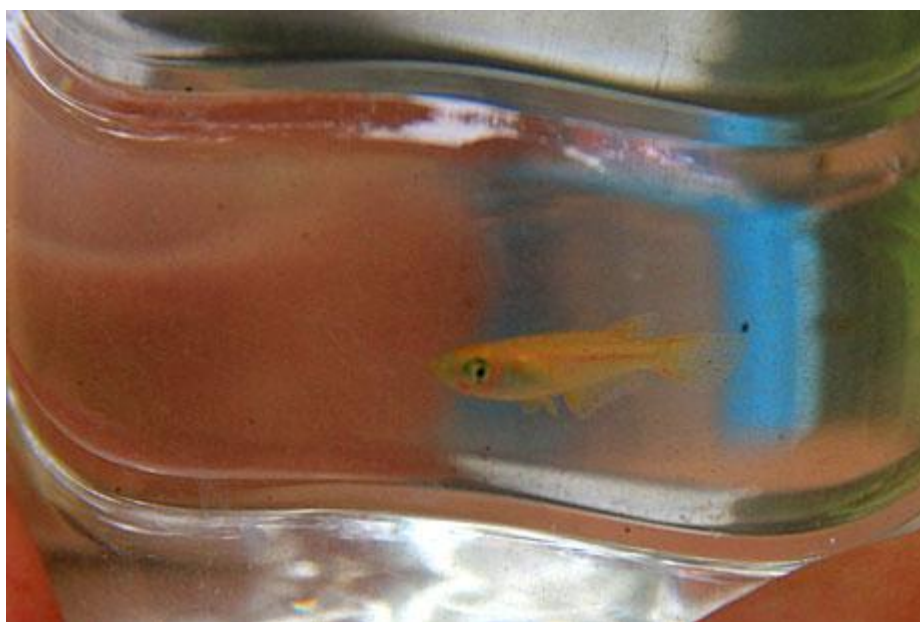


この「大池」は、水が茶色く濁っています。
水質指標では「硝酸態窒素」も、やや高い数値が検出されました。
ここで、北間さんが仕掛けを引き上げています。



仕掛けに掴まった魚はたくさんいました。
それを見て、みんな「すごっ！」「こんな汚い池でたくましいっ！」と声が上がりました。

でもその魚は、みんな「モツゴ」（くちぼそ）だけだったのです。
コイは大きいので、この仕掛けには掴まりませんが、「コイ」と「モツゴ」は、
その水に毒でも入っていない限り、かなり汚れた水質でも生きていける魚なのです。
この魚さえもないようであれば、それはひどすぎる環境なのです。



この大池につながる水路に「ヒメダカ」が見つかったのは救いでした。

「クロメダカ」のように、水質が良いところだけに棲む魚ではありませんが、この水路部分は水深が浅く、「コイ」が入り込めず、捕食されない環境だからこそ・・・ということでしょう。

「コイ」は「国内外来種」として、大きな問題を抱えています。

子どもたちは、みんな「すごっ！」「生きものはたくましいっ！」と声を上げます。それを見て大人たちは「こんな都会の中でも、生きものたちはたくさん生きづいている」と、結論づけようとします。

しかし、その生きもの棲む環境に目をやると、本当に厳しく、やっとの思いでこれだけがなんとか生きている・・・と感ずるのです。

「呑川」で、大田区「環境保全課」の行う「生きもの調査」に参加させていただくことがあります。



これはボラですが、写真を撮ろうと順番待ちをしている内に、一匹は腹を上にして苦しい状態になってしまいました。

狭い観察用の水槽ですから、酸欠状態になったのでしょう。



しかし、さすが「環境保全課」さん、ちゃんと手を打っていました。
白く丸く見えるものは、酸素を供給するカプセルで、それをその時は入れていたのです。
それでもこのボラは厳しい状態になってしまいました。



これは「アリゲーターガー捕獲作戦」を行ったとき、「おさかなポスト」の山崎さんが「呑川」の
魚を捕まえて見せてくださった時のことです。



たくさんの魚の中で、「オイカワ」は見る間に息絶えてしまいました。
「川」という環境の中では「池」と違って、水は常に流れています。
「溶存酸素」もたっぷりです。
でも、ちょっと水槽に入れただけで、その環境は壊れ、生きものの命を奪います。

生きものたちは「たくましい」ように見えます。
しかし、都会という環境の中では、とても厳しく、やっと生きている弱々しさを感じてしまうのです。
そして、だからこそ、「環境」を守り、改善しなければならないと、強く感じるのです。

今年の「呑川シンポジウム」で、東京大学大学院の鷲谷いづみ教授は、
「今は、”大絶滅時代”に入っている。その主要因は開発による環境悪化で、
1日に100種前後が絶滅する危機的状況にある」と、訴えられました。

こういう状況を見るとき、「生きもの」は単純に”たくましい”のではなく、その環境の中で
精一杯生きており、ちょっとした環境変化で、大きな打撃を受ける存在なのだと思います。
私たちは、だからこそ、環境を守る活動が大切なのだと思っています。

セミナー 「呑川を知ろう」

- *呑川のこと、どんなことを知っていますか？
- *上流まで行ったことはありますか？

*呑川の歴史、そして呑川周辺の生きものを知りましょう。

2011年9月17日(土) 14時~16時
「蒲田図書館」 2階多目的室

(蒲田図書館は、建築中の大田区体育館の裏にあります。
京急「梅屋敷」から5分。京急「蒲田」から10分。JR「蒲田」からは15分かかります。)

第1部 「呑川の歴史を知る」 大坪 庄吾
第2部 「呑川周辺の生きもの」 高橋 光夫
同時に「呑川新旧写真展」も行っています。

会費：無料

申し込み：先着40名(事前電話受付 蒲田図書館 03-3738-2459)

共催：蒲田図書館・呑川の会

——photo essay by——

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com
